

令和8年度 兵庫教育大学附属小学校 学校経営計画（案）

1 めざす学校像等

【はじめに】

昨年度は、新しい特別活動として始めた「スポーツフェスティバル」やSTEAM単元と関連させた「附小っ子学園祭」等の2年目の改善が進んだ。さらに授業改善による児童の学力向上やSTEAM教育に関する大学との共同研究が一層充実した。このことは、新教科「情報活用科」を新設して取組を展開した教育課程特例校（文部科学省指定）の取組とも関連し、高い評価を得て、今年度令和8年度、文部科学省の研究開発学校の指定につながった。

これらはすべての教職員が、取組の重点の第1である「気持ちのそろった校内組織・教師集団づくり」に向けて取り組んで、ベクトルを揃え努力した成果である。

今年度は、めざす学校の具体像についてバージョンアップするとともに、お互いに尊敬しながらも切磋琢磨し、その成果を児童に還元するよう努める。それらを通して、附属学校のさらなる魅力化を図る。

なお、人事交流が激しい本校の現状に鑑み、学年の生徒指導体制づくり、新着任教員の円滑な学級運営のため、本年度はチーム担任制（附属小学校型）を試行する。

○ 学校像

先端的な教育環境のもとで、幼稚園、小学校、中学校の12年間を通して、園児・児童・生徒、教職員、保護者が一体となって、地域社会と連携しながら、一人一人の子どもの学びと成長が保障される創造性豊かな学校をめざします。

○ 子ども像

これからの社会において必要とされる情報活用能力を身に付けるとともに、主体的かつ対話的な教育活動を通して、心身ともにたくましく、未来を切り拓いていける知的創造力と寛容性を兼ね備えた、グローバル社会で活躍できる人間を育成します。

○ 教員像

全国の自治体から附属学校園に派遣される教員が、附属学校教員としての自覚をもち、互いに敬意をもって高め合い、学校における働き方改革を踏まえながら、先進的で優れた教育実践に取り組み、地元自治体の中心的な教員として活躍できる資質・能力の向上に努めます。

学校教育目標

「人間として生きぬく力を育てる」 ～夢に向かって挑戦し続ける人の育成～

「学ぶ」ことの大切さ、楽しさを知り、「学び」の本来の意義を理解し、生涯にわたって「学び」続ける力と確かな「人間力」

子ども像の実現のために学校として大切にすること

○確かな学力の定着 ○情報活用能力を生かし、好奇心・探究心をもって学び続ける力

○豊かな感性と表現力 ○多様性を尊重して他者とかわる力

学校運営目標 校長として大事にしたい姿勢

「研究と学校改善が一体となった学校」「教員も児童も成長を実感できる学校」

「行きたくなる学校～子どもも、保護者も、教員も」「伝統は革新の連続である」

・「人間として生きぬく力を育てる」学校づくりを学ぶ。

学校経営、教科指導、生徒指導、STEAM教育、地域と共にある学校

・「子どもが最も大事、子どもに生きぬく力(測れる力と測れない力)をつける」

・「地元に戻ってからも活躍できる教職員をはぐくむ」

2 中期的目標

1 心理的安全性が確保され、気持ちのそろった校内組織・教師集団づくり

(1) 管理職による的確なガバナンスと管理職を含む教職員間の関係づくり

(2) 教職員間が互いに助け合い、多様性を認め、協力して同僚性を高めること。

管理職、ミドルリーダー、学級担任、特定教諭、非常勤講師等がそれぞれの責任を果たす体制づくり。校務分掌の不断の改善。

積極的・意欲的で一体感のある教職員集団の構築をめざし、1年目の教員も含めて担任団や校務分掌から学校経営計画の実現に向けた改善策や新たな取組が、積極的・効果的に提案される学校風土を醸成する。そのため、本年度はチーム担任制（附属小学校型）を試行する。

(3) 児童に対する研究や取組の成果を意識する。

良い授業の結果として、児童の測れる学力の向上をも検証するため年度初めや年度終わりに行う学力テストや質問紙調査等により検証し、自己の授業や学級経営を振り返り、授業改善やカリキュラム改善の参考とする。

（東京書籍等の業者テストや全国学力学習状況調査状況の分析検討）

2 大学との共同研究体制の確立

(1) 「個別最適化」と「協働的な学び」の実現をめざし、「先進的」な授業改善に取り組むと共に、教員養成フラッグシップ大学を構成する附属小学校として、STEAM教育の共同研究に一層努める。

①大学教員による指導の充実 ②研究授業及び授業検討会、研究大会開催

(2) 入試制度改革の継続。大学教授等と連携した特別支援教育の充実。新しい附属学校園連絡進学の在り方改革を継続する。

(3) 大学との共同研究体制を一層充実し、小中学校で研究開発学校の取組を展開する。

(4) 1年生を中心に、附属幼稚園と連携して「懸け橋プログラム」についての研究に着手する。

3 安全・安心な学校づくり

(1) いじめの未然防止、特別支援教育の充実、組織対応・早期対応の推進

附属学校教育相談室は3年目となった。昨年度導入した「子ども発達支援医（スクールドクター）」「スクールロイヤー」は、児童の身体的・精神的な医療的見立てやケア、また保護者の精神的ケアが必要な事案や、学校園に対する過度の苦情など不当な要求に対する法的対応が必要な事案、さらにこれらの要素が複合する事案などに、適切に対応し高い専門性を必要とするだけでなく、対応が長期間に渡ることが多い教職員の業務負担や心理的負担の解消に、今年度も大変有効であるとする。加えて、スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーも、自治体の福祉部門とも連携するなど丁寧な対応に活用する。

(2) 教科や特別活動、総合的な学習の時間等における様々な取組を通して相手の立場を考え、**違いを認め合う児童集団を形成する。**

(3) 発達段階に応じた授業規律、生活規律等の検討と統一した指導

どの学年も赴任した先生と共に統一して指導できる指導ルールの明確化

(4) コロナ後に全国的に増加している不登校児童について、長期欠席の理由を可能な限り把握して、附属学校教育相談室の適切な活用等により、組織的なアセスメントと対応に努める。

(5) 児童や保護者への相談・支援体制確立。（チャレンジルームの適切な活用）

(6) 管理職の指導の下、入試に臨まねばならない6年生の進路指導体制を充実させる。具体的には年3回の業者テストの実施、順位等の成績も保護者に開示する。進路対策会議を実施し担任教諭の負担を軽減しながら、きめ細かな進路指導を継続する。

(7) 人事交流が激しい本校の現状に鑑み、学年の生徒指導体制づくり、新着任教員の円滑な学級運営のため、本年度はチーム担任制（附属小学校型）を試行する。保護者にもその旨発信する。具体的には、学級担任は固定しながら、曜日によって他学級にも担任として入るものである。

4 附属学校としての新しい文化の創造

(1) カリキュラムマネジメントの推進

① 昨年度、新教科「情報活用科」を新設して取組を展開した教育課程特例校（文部科学省指定）の取組は高い評価を得て、令和8年度からの、文部科学省の研究開発学校の指定につながった。今年度は研究開発学校の計画に従い、情報活用科を廃止して、総合的な学習の時間の取組に情報活用能力育成と探究活動を両立させるよう取組を推進する。

② さらに総合的な学習の時間で育成した情報活用能力を各教科と関連させ、各教科の改善を図る事を本校の魅力化の一つの柱とする。

③ 新しい学校行事の「スポーツフェスティバル（6月）」と「附小っ子学園祭（2月）」も3年目を迎えた。今年度も夏の猛暑における子どもの安全確保と、STEAM教育と関連させた年間を通したバランスの良いカリキュラムのもと、さらに充実させる。

(2) 働き方改革の推進

新しい行事の創造・再編等の取組が進められるにつれて、働き方改革への意識が少し希薄となっている感がある。働き方改革の推進の目的は限られた時間を、研究の推進や教育活動の充実のために有効利用するためであることを忘れてはならない。特にノー残業デーの取組の推進を図る必要がある。

①全国の附属学校の課題である働き方改革の確立

在校時間の適切な管理、時間外勤務の適切な取り扱い、会議の開始時間と終了時間の明示。休憩時間確保と勤務時間外の会議の原則禁止

②取組の継続・改善のため在籍3年を見越した校務分掌の改善検討

③地元自治体の働き方改革のリーダーとなるタイムマネジメント能力獲得

④新しい人事交流先との協定締結と計画的な拡大

(3) 附属学校特有の学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の推進。

学ぶ意欲がある「地域の教員の知の拠点」をめざす。附属学校ならではの効果的で意味あるコミュニティ・スクールの取組としての研究を推進する。

(4) 実地教育の改善・充実

大学の重要なカリキュラムであり附属学校の本務である実地教育の一層の充実に努め、一層のDX化も含めて充実した実地教育をめざす。

特に各学年1教室に、授業の録画配信設備の整備及びキュレーションに関わる施設整備ができたことから、新しい充実した設備の下で、大学と連携し新たな実地教育の推進に取り組む。

5 魅力的な学校づくりの推進のための5つの視点

(1) 校種間連携の推進

附属学校園合同の学校安全事業の取組や小中合同研究発表大会の開催、小中合同のPTA行事の開催、人事交流等などを通して、予想以上に、校種間連携が進んできた。今後さらに両校教員の信頼感を一層深めて、附属小・中学校がより一致した方向性で改革を進めていきたい。

(2) カリキュラムマネジメントと学校行事の創造

- ① 昨年度、新教科「情報活用科」を新設して取組を展開した教育課程特例校（文部科学省指定）の取組は高い評価を得て、令和8年度からの、文部科学省の研究開発学校の指定につながった。今年度は研究開発学校の計画に従い、情報活用科を廃止して、総合的な学習の時間の取組に情報活用能力育成と探究活動を両立させていくよう取組を推進する。
- ② さらに総合的な学習の時間で育成した情報活用能力を各教科と関連させ、各教科の改善を図る事を本校の魅力化の一つの柱とする。
- ③ 新しい学校行事の「スポーツフェスティバル（6月）」と「附小っ子学園祭（2月）」、「宿泊行事（2学期）」の取組のさらなる充実と改善を図る。

(3) 知の森・アートの森基金事業を STEAM 教育とコミュニティ・スクールとして推進し、図書館の魅力化と地域開放、今年も中庭で充実した活動ができる様に児童と共に作り上げる活動を完成させる。

(4) 異文化理解教育、国際理解教育の推進

大学グローバル教育センター等との連携により、日常的に留学生との触れあいの機会や異文化理解教育、国際理解教育を推進し、世界で活躍できる土壌を児童期から醸成する。

令和8年度8月に児童・生徒の外国（フィンランド）への短期留学訪問を継続する。また、今年度と同様、児童がオンラインによるフィンランド等海外の子どもとの交流機会を確保し、児童のみならず附属学校教員による台湾等交流のある海外の学校への派遣研修交流を今年度も積極的に推進する。

また、今年度はニュージーランド等オセアニア地域の学校の交流先とのオンライン等による交流開始をめざす。

(5) 「教員養成の知の拠点化」推進

地元教育委員会の教科研究会等への参加や兵庫県教育委員会・総合教育センター、適正な研究団体との連携に努め、本校を実践研修の場としての活用を進めることや、自治体単位で行われている研修や研究会を本校で開催することも工夫する。それらの発信を通して、附属学校の存在価値を高め、新任教員、学部卒業生、実地学生、附属学校教員の資質向上に貢献する。また、附属学校園が共同して、地域に貢献する附属学校公開講座の開設検討を開始する。

3 今年度の重点目標と具体的な教育活動等

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組	評価指標	自己評価と学校関係者評価 達成状況（4段階評価）
1 気持のそろう 校内組織・ 教師集団づくり	(1)大学・管理職による的確なガバナンスによる学校運営 (2)教員やPTAに対する管理職の理念浸透と管理職を含む同僚性の醸成 (3)教員の指導実態と子どもの学力実態の把握と改善	(1)学則に則った学校運営。理念浸透、保護者向け附小だよりと教職員向け校長通信、人事評価制度の適切な活用 (2)学校教育目標達成のための取組の推進状況 校務分掌の改善。管理職、ミドルリーダー、学級担任、特定教諭、非常勤講師等がそれぞれの責任を果たす体制づくり。 チーム担任制の実施 (3)アンケートと全学年学力テストを行い、教員がその間の指導状況を自覚する。指導と評価の一体化	(1)学長及び大学への適切な報告、学則に沿った計画的学校運営ができたか。附小だより、校長通信(月1回以上) (2)自己評価制度の適切な運用 学校教育目標達成のためにどのような取組を行ったか。 「職場アンケート」データの改善 職場内人間関係の肯定的評価、困った時に管理職への相談状況 心理的安全性の意識向上 (3)学力テストの平均正答率等、授業を担当した児童の学力状況 分かる授業づくりや肯定的評価、教科が好きな児童の割合（保護者や児童アンケート）	
2 大学との 研究体制の 確立	(1)先進的な授業改善 (2)大学との共同研究の取組	(1)研究開発学校の取組の推進 大学教員による指導の一層の充実 クロームブック活用の工夫 「キュビナドリル」有効活用 (2)インテル STEAM.Lab を活用するなど STEAM 教育の取組拡大 授業実践交流会、小中学校での研究開発学校の取組の展開	(1)総合的な学習の時間の取組に情報活用能力育成と探究活動の取組が計画的に進んだか。情報活用能力を各教科と関連させた授業改善が進んだか。（研修会回数や公開授業数等） クロームブック有効活用状況 キュビナドリルの活用状況 (2)インテル STEAM.Lab を活用した教員数 STEAM 研究の広がりや進展拡大つながりをふまえた小中の連携が進んだか。小中学校の連携内容や回数等	

<p style="text-align: center;">3 安全・安心な学校づくり</p>	<p>(1) いじめの未然防止、早期・組織対応、特別支援教育の充実</p> <p>(2) 違いを認め合う児童集団</p> <p>(3) 授業規律、生活規律等の徹底</p> <p>(4) 長期欠席者への適切なアセスメントと支援</p> <p>(5) 相談・支援体制確立</p> <p>(6) 進路指導体制の充実</p> <p>(7) 学年生徒指導体制づくり</p>	<p>(1) 6 初児生第 20 号 R7.3.6 通知を踏まえ、平時からいじめに備える内的、外的な危機管理意識の醸成「校内いじめ対策会議」の的確な開催、情報集約。相談・支援充実、事案発生時の具体的対応の共通理解とチャレンジルームの適切な活用</p> <p>(2) 教科や特別活動等の様々な取組児童、教職員の豊かな人権感覚の醸成</p> <p>(3) 発達段階に応じた授業、生活規律等の共通理解と徹底、校内事故・けがの減少。</p> <p>(4) 附属学校教育相談室の適切な運用</p> <p>(5) 児童・保護者の相談・支援の実施 子ども家庭センターや自治体、警察等関係機関との的確な連携</p> <p>(6) 入試に臨まねばならない 6 年生の進路指導体制を充実</p> <p>(7) チーム担任制（附属小学校型）の試行</p>	<p>(1) 文科省チェックリストの活用と指針の不断の見直しをしたか。いじめの把握件数、配慮を要する児童の対応状況把握、個別の支援計画の作成状況。発達支援医・スクールロイヤーへの相談件数等。児童、保護者、アンケート結果</p> <p>(2) 学校行事等特別活動の取組目標に学級集団づくりの観点を入れる。児童の表現の機会の充実。SNS 講習会実施</p> <p>(3) 附属小のルールが徹底できたか。保護者アンケート結果等、怪我による保健室来室児童数 学習と関連付けた取組</p> <p>(4) (5) SC、SSW 等との的確な連携状況、長欠・不登校児童の相談件数や関係機関の対応状況件数等</p> <p>(6) 進路対策会議、年 3 回の業者テストの実施</p> <p>(7) 教員、児童、保護者の安心感の向上（アンケート） 保護者へ発信</p>	
<p style="text-align: center;">4 附属学校としての新しい文化の創造</p>	<p>(1) カリキュラムマネジメントの推進</p> <p>(2) 働き方改革の推進</p> <p>(3) 学校運営協議会制度の効果的な運用</p> <p>(4) 実地教育の改善・充実</p>	<p>(1) 大学教員の指導の下、研究開発学校の計画に従った取組の推進 スポーツフェスティバル、附小っ子学園祭、宿泊行事等の円滑な実施と改善 STEAM 教育の取組充実</p> <p>(2) 学年主任等ミドルリーダーの把握と声掛けによる組織的な推進。 在校時間の適切な自己管理、時間外勤務の適切な取り扱い、時間外会議の原則禁止と会議時間の短時間化等効率的な運用</p> <p>(3) 地域の「教員の知の拠点」をめざす。附属学校ならではの効果的なコミュニティ・スクール推進 新しい地域貢献事業による地域貢献</p> <p>(4) 教育実習総合センターと具体策の検討、さらなる改善策を検討 授業録画配信システムの活用</p>	<p>(1) 総合的な学習の時間での情報活用能力育成と探究活動の取組が計画的に進んだか。情報活用能力を各教科と関連させた授業改善が進んだか。 （研修会回数や公開授業数等）標準授業時数等の実施状況。大学との共同研究を推進している STEAM 教育の推進状況</p> <p>(2) 時間外勤務手続きの改善状況 時間外勤務時間の縮減状況、労働基準法の遵守状況、ノー残業デー、ノー会議デーへの積極的な取組</p> <p>(3) 学校運営協議会の定期的な開催。研究大会における公立学校教員の参加状況、学校の地域貢献の状況 附属学校公開講座等の検討状況</p> <p>(4) 実地教育学生の実習後のアンケート結果の改善状況 「迷っていたがなりたくなった」 授業録画配信システムを活用した取組の実施状況</p>	

5 魅力的な学校づくりの推進のための5つの視点	(1) 校種間連携推進	(1)小中合同研究発表大会実施 幼・小・中合同の学校安全の取組 幼小中合同の取組の推進 新しい入試制度の運用、6年生の進路指導体制の充実と計画	(1)小中合同研究発表大会の参加者数 研究授業数等、学校安全の取組状況 子どもや教員の幼小中交流回数や研究の状況等。6年生に的確な進路指導ができたか。	
	(2) 新しい特別活動、学校行事の創造。 (3) 知の森・アートの森基金事業推進 (4) 異文化理解教育、国際理解教育推進 (5) 「教員養成の知の拠点化」推進 (6)その他 入試制度の改善 ミドルリーダーが成長する学校づくり	(2) 1学期「スポーツフェスティバル」と2学期宿泊行事（5年生日程の変更等）、3学期「附小っ子学園祭」の学校行事の充実と改善を図る。 (3) 図書館と中庭改善の完成 図書館の開放 児童の安心安全な居場所づくり (4)児童の外国（フィンランド）への短期留学訪問。オンラインによるフィンランド等海外の子どもとの交流機会を確保。教員による台湾等交流のある海外の学校への派遣研修交流の推進。 (5)附属学校教員が研修講師となって地域に出かけていく機会や学校を実践研修の場としての活用を進め発信する。 (6)大学教授と連携した入試問題改善の取組と就学前施設との連携。附属学校園間の望ましい連絡進学の見直し。指導主事や、主幹教諭等で活躍できるミドルリーダーづくり 自治体指導主事・管理職選考受験推進	(2) 児童・保護者・教員のアンケート結果 (3) STEAM教育とコミュニティ・スクールの活動場所として整備できたか。 図書館の開放日数 (4)海外からの訪問団や留学生等との交流状況。フィンランド派遣ができたか。 (5)研修講師となった人数と回数 研修の場となった事例や地域の教員の研修会等の開催状況 附属学校公開講座等の検討状況 (6)新入試制度の実施が円滑にできたか 入学準備委員会の運用状況 連絡進学の在り方の検討状況 大学院進学希望者と在籍状況 主幹教諭の配置状況、管理職選考の受験状況等	

4 学校関係者評価

附属学校運営協議会による